

ウイグル族のトーテム——狼に対する崇拜*

ジ ラ イ タ ウ テイ
熱 拉 依 ・ 達 吾 提
高 橋 庸 一 郎 (訳)

本文はウイグル族の狼トーテムに対する崇拜及びその内容、特徴、またその生れた原因と発展の過程を探ろうとしたものであり、これはウイグル族の原始文化、意識形態、芸術、美意識、歴史等を研究するに当って一定の意義を有するものである。

トーテム崇拜は原始社会の一種の早期の原教的信仰であり、また人類の歴史の上で最も早く、最も秀れて特徴的な文化的現象の一つであり、それは人類の多くの文化的現象の起源と密接な関係を有している。图腾 (totem) という語は、北アメリカインディアンの阿耳貢金 (Algonkin-tribe) 部族の言葉で、意味は「彼の親族」という意味である。イギリス人 J・朗格 (John Long) が、彼の『インディアン旅行記』という書の中でこの名称を使ったのである。イギリスの人類学者弗雷沢 (J. G. Frazer) (1887) の『トーテム主義と外婚制』及び佛洛伊德 (Sigmund Freud) (1856～1939) の『トーテムとタブー』等のトーテムに対する論述によって、トーテム信仰のいくつかの次のような特点を引き出すことが出来る。

1. 原始の人類はある種の動物や植物、或は動物でも植物でもないもの (雲、雨、雷、月、日、山) を自分のトーテムとする。氏族全体の名称はトーテムを以て名づけるが、その中で動物を氏族全体のトーテムとするものが最も多い。

2. その氏族の祖先はトーテムと相関する事

物との間に、血縁或いはある種の特殊な関係があり、しかもその信仰は深く、その氏族のトーテムには一種の超自然的力があり、その氏族の構成員に対して必ず保護するという作用があるものと認められる。

3. 絵画や彫刻等の技法を用いて、氏族のトーテムの形象を、部屋のたれ幕、すだれ、ハタ、柱、或いは器物の上に装飾し、又あるいは自分の身体のかざりとなる入墨の図案とする。そしてそれをその氏族の標識とし、あわせてそれにはある種の神秘的力がそなわっているものとする。

4. トーテム崇拜は氏族制を維持し擁護する重要な要素である。トーテムは氏族の構成員が互いに親縁関係にあることを表わす標識であり、彼等はトーテムが同じではないという事をもって一つの独立した氏族であると見なすのである。同一トーテム氏族内での通婚はタブーとなっている。

総じて言うならば、原始の人類はトーテムを彼等の祖先と見なし、また氏族の族紋でありまた保護者であると見なしていたのである。

原始の人類は、自分達と自分達のトーテムとの間には密接な血縁関係があるという事を証明する為に、多くのそのトーテムに関する神話や伝説を創造した。そしてこれ等の神話や伝説は我々の思いを「人類の幼児期」に向けさせる。故に我々が彼等の生活や思想といった方面を理解するということについては多大の価値がある

* 原題『維祿族対图腾——狼の崇拜』

この論文は《新疆大学学报》(哲学社会科学版) 1991年第19卷第1期に掲載されたものである。本学報の編集部、副編審、周軒先生の御承諾を得てここに訳出できたことを表明し、著者及び周軒先生に改めて感謝申し上げる。

と思われるのである。

ウイグル族の祖先の氏族社会の段階では狼を自分達のトーテムとしていたのである。「学界では一般に認められているが、丁零、高車、鉄勒は今のウイグル族の祖先であり、丁零、高車、鉄勒の歴史は今のウイグル族の遠古史の重要な構成部分である」(段連勤『丁零と高車と鉄勒』)。鬼方、丁零、鉄勒というのはウイグル族のそれぞれ異った時代の異った呼称である。彼等は前後して我国の西北地区、蒙古草原、南シベリア、内蒙古の陰山及び河套などの広大な地域で活躍した。彼等はすべて狼をトーテムとしたのであり、この事は史書の記載の中に見出すことが出来る。「鉄勒、丁零、高車、回紇はみな狼の種なり」(周書・異域伝)、「鉄勒は狼の種なり」(漢書・匈奴伝)とある。

ウイグル族の古代史詩『烏古斯可汗の伝説』の中にも多くの狼に関する記述がある。「烏古斯可汗の兵営のテントの中に、／太陽のように明るい一筋の光が射し込んできた、／その光の中に一匹の蒼い毛に、蒼いふさふさした胸毛を持った堂々たる大狼があらわれた。／蒼い狼は烏古斯可汗に言った。／「オオ！烏古スよ／お前は烏魯木に征伐にゆかねばならぬ、／オオ！烏古スよ／私におまえの前をゆかせておまえを案内させてくれ」／烏古斯可汗は兵営の前の道にたつた。／そして隊列の先頭に、一匹の蒼い毛に、ふさふさとした蒼い胸毛をもった堂堂たる大狼が歩いてゆくのをみた。／そこで隊列はヒタとその蒼い狼の後について行進していった。」

この史詩の中に記述されている二回にわたる大きな戦役は、すべて狼のみちびきと、啓示のもとで、烏古斯可汗は勝利を勝ち得たのであった。

1957年蒙古の考古学者、杜魯木加蘇魯は、紀元570年に回紇可汗の磨延曷が立てた一つの石碑を発見した。その石碑には一匹の蒼い狼が子供に乳をのませている絵が刻してあった(阿不都克里木、熱合曼『ウイグル民俗学概論』)。

17世紀の中央アジア史学者、阿不勒哈孜は彼

の『突厥世系』という書の中に、一つの古いウイグル伝説を記載している。

ある時、ウイグル人は戦い破れ、彼等は山の中腹で敵に囲まれてしまい、退路も断たれて、全軍遣滅という苦境に追い込まれた。その時、突然一匹の狼があらわれて彼等にむかってやって来た。苦境の内にあったウイグルの軍民は後から狼にしたがって山のふもとにつくことが出来た。狼は一つの山の中の洞穴につき進んでいき、ウイグル人達もつづいて中に進んでいった。彼等は真暗な洞穴を長い間歩きつづけた。そして最後に、狼は彼等を洞穴のもう一つの出口にみちびいたのである。人々は眼の前が突然明るくなり、パッと広々とひらけてきたのを見た。彼等の前にひらけていたのは、水があつて草がゆたかに茂った、まるで天国のように美しい大草原であつた。ウイグル人はこうして滅亡の窮地からすくわれたのである。これから以後、彼等は狼を一つの神聖な動物とみなして崇拝するようになったのである。」(阿・熱合曼『絲路伝説』)以上の神話から読みとれることは、彼等が狼を自分達の祖先とみなしたことで、そこで彼等は狼をトーテムとする神話をつくり出したということである。

紀元840年、ウイグル人が西に移動した後、とりわけ彼等がイスラム教を信仰するようになってから以後の文献の中から、トーテム狼に関する記載をさがし出すことは困難である。しかし民間の文学作品の中には時として少しは見出すことが出来る。例えばウイグル民間故事の『神樹母親』の中には、やはり狼を保護神とした讃歌と描写がある。その物語の中で、狼が獐獐恐るべき妖怪に襲われ追いかけられようとした時、「……天上から一条の光がさすと、一匹の蒼い狼が空中から妖怪のそばにおりて来た。その狼はおそろしい目付きで妖怪をにらみつけ、重々しいよく通る声で言った『罪深き怪物よ！はやくここを立ち去れ！さもなくばおまえを喰いつくしてしまうぞ！』。妖怪はビクッとして手にしていた斧を放り出すとあたふたと逃げていった。……月が妖怪の前に大きな影をう

つし出していた。妖怪が頭を挙げて見ると、空中から射す明るい月光の中に一匹の大きな狼が立っていた。妖怪はおどろいて命からがら林の中からもがき出て来たが、足がぬけてたとたん、この一匹のおそろしい妖怪は大木の下敷となって体をたちきられてしまった。」

ウイグル人の日常生活の中で、狼を崇拜するという習俗は古代から今に至るまで延々とつづいている。例えば産婦は分娩の時に生れて来たのが男の子か女の子かを聞くことになっているが、その時の言葉は、「生れたのは狼か、それとも狐狸か？」というのである。男の子をおそれを知らない狼とみなしているからである。『突厥語大辞典』の中にもこうした表現が出て来る。

ウイグル人は狼の骨を保存して護神符とし、遠くへ出かける時はそれを身につけてゆくのである。赤んぼうのゆりかごの上に狼の脚のくるぶしの骨をぶらさげるが、その目的は邪を追い払うことと、その子に勇敢な大人に成人するよう希望を托しているのである。また婦人は分娩後、狼の皮の上に体を横たえる（新しく剥いた狼の皮でなければならない）。大工や木工職人の中には木でつくられた器物の上に狼の頭を刻りつけるものもある（例えば木のしゃくや、楽器）。これ等の習俗は局部的なものではあるけれども、しかしそれはウイグル人の狼を崇拜する習俗をよくあらわしている。

狼はウイグル族のトーテムであるばかりでなく、また古代北方他の氏族、部族、民族のトーテムでもあった。筆者の考え方は漢文史書の中の神話や伝説、それに近代考古学上の資料の中から実証することが出来る。

『魏書・高車伝』には、「或は云く其の先は匈奴の甥なり、……俗に云う、匈奴の单于二女を生む、姿容甚だ美なり、圜人皆以って神と為す、单于曰く、吾れに此の女有るも、安ぞ人に配す可し、将に以って天に与えんと、乃ち国の北、無人の地に高き台を築きて、二女をその上に置きて、曰く、天自から之を迎えんことを請うと、三年を経て、其の母之を迎えんと欲

す、单于曰く、不可なり、未だ之を間に澈せざるのものと、復た一年す、乃ち一の老狼有りて昼夜台を守りて嗥呼す、台の下を穿ちて空穴を為るに因り、時を経て去らず、其の小女曰く、吾が父の我を此に処らしむるは、以って天に与えんと欲すなり、而るに今狼来る、或いは是れ神物なり、天之用をすこと然りと、将に下りて之に就く、其の姉大いに驚きて曰く、此れは是れ畜生なり、乃の父母を辱しむること無かれと、妹従わず、下りて狼の妻となりて子を産む、後に遂に滋げく繁りて国を成す、故に其の人好みて声を引き歌を長ずるには、また狼の嗥するに似たり」とある。内蒙古・伊克昭盟の杭锦旗・阿魯柴登で発見された匈奴の貴族の金の冠飾りは戦国時代（紀元前475～前221年）に当るものと思われる。それは冠の頭部と帯の部分からなっているものである。冠の上には一羽の雄の鷹が彫刻されており、それは黄金のちょうつがいと合された半球面体としてすえつけられており、その上には四つの、羊を襲う狼が円形に浮き彫りにされている。また冠の帯の上には虎、馬、羊が、これも円形に半浮き彫りにほられているのである（『中国北方民族関係史』第1）。これ等からも匈奴と狼が一種の特殊な関係にあったことが見てとれる。

突厥人は最初准噶尔盆地の北にその源を発したが、それは大体今の葉尼塞河の上流であり、これもまた狼をトーテムとした部族であった。

『周書』卷五十に、「突厥は蓋し匈奴の別種なり、姓は阿史那氏、別れて部落を為す、後に国の破る所に臨みて、^{ことごと}く其の族を滅す、^{ひと}り兒にして年且つ十歳なる有り、兵人其の小なるを見て、之を殺すに忍びず、乃ち其の足を削り、草沢の中に棄つ、牝の狼有りて肉を以って之を飼なう、乃ち長じ、狼と合して、遂に孕ませること有り、彼の王此の孩尚む在るを聞き、重ねて遣して之を殺す、使者狼の在るを見、并せて狼を殺さんと欲す、狼遂に高昌国の北の山へ逃ぐ、山に洞穴有り、穴の内平壤にして草茂り、周回数百里有りて、西面山を俱ない、狼其の中に匿る、遂に十男を生む、十男長大となり、外に妻

に托して孕ます、其後各々一姓有り、阿史那是即ち一なり」とある。

ソ連の考古学者が蒙古で一つの古廟の遺跡を発掘し、その中から一つの腰帯を発見した。その腰帯の正面中央には、一匹の母狼が四人の突厥の男児に乳をのませている図柄が刻されている。(阿木都克里木・熱合曼『ウイグル民俗学概論』)

阿勒泰山脈の中央アジア部分で一つの紀元前六世紀から七世紀に属すると見られる突厥語系民族の古い堡壘が発掘された。この堡壘の中から出土した一つの鞭の柄の上には三つの狼の頭がきざまれていた。発掘の仕事に参加した魯丁庫(Rodimcol)は、「この鞭の柄の彫刻は極めて精美である。この彫刻された狼には一對の鋭くとがったキバが有り、また二つのランランと遠方をみすえる晴と、いかなる物音をも聞きのがさないと云ったピンと立った二つの耳があって、これは見る人を驚嘆させずにはおかない。」と述べている。

以上の記述の中から我々ははっきりと、突厥と狼との間には親密な関係があるために、彼等は狼の形を石碑に刻したり、或いは日常に用いる器物の上に刻したりするのであるということを見てとることが出来る。これ等の事は突厥が狼をトーテムとする部族であったことを証明するに足るものである。

ウイグル、匈奴、突厥以外で、古代北方の烏孫、薛延陀などの民族もまた狼を自分のトーテムとしたのである。『漢書・張騫伝』に、「天子数たび騫に大夏の属を問う、騫既に侯を失う、因りて曰く、臣匈奴の中に居るに、烏孫王の昆莫と号するを聞く、昆莫の父難兜靡は本と大月氏と俱に祁連、敦煌の間の小国に在るなり、大月氏攻めて難兜靡を殺し、地を奪い取り、人民亡げて匈奴に走る。昆莫新生するに、傅父布翁侯に就き抱きて亡ぐるに草中に置く、為に食を求め、還るに、狼の之に乳するを見る、又烏、肉を銜みて其の旁に翔す、以って神と為す、遂に持して匈奴に帰し、单于愛しんで之を養う、壮に及び、其の父民衆昆莫に与みするを以って、

将兵をして数たび功有るしむ」とある。(王明哲、王炳華『烏孫研究』)

『新唐書、薛延陀伝』には、「初め、延陀将に滅びんとす、其の部に食を^{はどこ}丐すこと有れば延、帳下に客となる、妻客人を視るに狼首なり、主覚えず、客已に食す、妻部人に語りて共に之を追う、郁督軍山に至りて、二人に見ゆ、曰く、我は神なり、薛延陀^{しばろ}且くして滅びんと、追う者惧れ、却ぞきて走る、遂に之を失う、是れに至りて果して此の山の下に敗る」とある。この伝説は、薛延陀と烏孫はともに狼のトーテムに対する崇拝を持っているということを説明している。

即ち総じて言えば、古代北方で生活していた、ウイグルを含む各部族は、全体的に皆狼を自己の神聖なトーテムとしていたということである。こうした中で注目に値する事は、長期にわたる発展過程の中で、狼は各部族のトーテムから徐々に変化して象徴的意味を持った形象になっていったということである。彼等は狼を勇敢で強大で恐れることを知らないものの象徴とみなし、軍隊の武勇を尊ぶ精神を高揚させる為に、狼の図案の旗をかがげ、且つまた狼を自己の政權の象徴とみなしたのである。つまりこの象徴にはあるいくつかの政治的要素を含んでいるということである。例えば唐朝の將軍郭子儀は、延谷を呼んで回紇の可汗を拝せしめた時に、「可汗は其の強きを恃^たのんで、兵を陳べ、子儀を引かんとす、狼の大幡を拝せしめて而る後に見えん」といい(馮家升、程溯洛、穆広文編著『維吾尔族史料簡編』上冊)、突厥可汗は、「牙門に金狼の頭の大幡を立て、坐して常に東向す」とある(『維吾尔族史料簡編』)。

『周書』卷五十『異域伝下・突厥』には、「大幡の上に、金狼の頭を施す、侍して之を衛らしむる士、之を「附離」と謂う、夏言では亦た狼なり、蓋く本と狼生にして、旧を忘れざるを志すなり」とある(『維吾尔族史料簡編』)。また『新唐書』卷八十『太宗諸子伝』には、「常山王は乾好を承け、突厥語を講し、また突厥の装を穿る、容貌の突厥人に類似したものを

選択し、羊裘を穿せ、髪を披かせ、五人を組み一落を成さしむ（落は即ち戸なり）、氊帳を張り設けて居らしむ、帳の前には五狼頭を建て、戟を分ちて陳となし、幡旗を懸挂す、而して自己は穹廬を建て居住し……」（林幹『突厥史』）とある。文帝はこの策を採用し、そこで使を遣わして伊吾道（今の新疆伊吾県）に出し、可汗のテントにおもむかせて、彼に一つの狼頭の大幡を贈ったのであった（『突厥史』）。

それでは何故にウイグル族の先祖は狼を自分達のトーテムとしたのであろうか。

最も早期のトーテムは動物であるということは、学界でも認められていることである。よってトーテムの生れた根源を探るということは、即ち主には動物トーテム発生の来源を探るということになる。動物トーテムの発生と原始的狩猟とは密接な関係がある。原始人の最も早期の生活は、採集と狩猟であってこの二つは動物と切りはなして考えることは出来ない。彼等は動物を用いて食用となし、動物の皮を用いて衣服を作り、その骨と羽毛を用いて工具と装飾品を作ったのである。彼等は動物そのものから多大な恩恵を受けているのである。プレハーノフは、「原始人はいくつかの自然現象と接触し、そして彼等は、主にはいわゆるすぐれた動物世界を知ったのである。彼等は動物を通じて其の他の自然界を判断したのであり、多くのある種の動物の活動から自然現象を説明するという物語を創造したものと思われる。」と述べている。遠い古い時代、原始人の生活条件は極めて劣悪で、飢餓、猛獣、疾病及び各種の自然災害などが原始人に極めて大きな危険をもたらした。考古学的資料の明かにする所によれば、遠古の時代には悪虫猛獣が非常に多く、人類に対して最大危害をもたらすものは各種の猛獣であった。彼等は常に猛獣に襲われるという被害に会う可能性があった。故に彼等は、生存していく為に、積極的方法を採用してこれ等の猛獣に抵抗していく外に、一種の消極的方法を採用して安らぎを求めたのである。この方法は相手にひざまづき拜んで助けを祈り求めることではなく、相手が

自分と親であることを認めることである。即ち自分に対して直接危険のある、或いは自分に対して益をもたらす動物を自分の父親、或いは叔父、或いは兄弟、或いは……としてしまうことである（例えば甘粛省の肅南の裕固族自治県の東部裕固族は、狼を『黒い口の叔貴』と称している）。彼等はある種の動植物と親属関係をつくり上げた以後は、その種の動物のもつ超自然的力を獲得することが出来、トーテムの動物として出来る限り親属としての義務をはたして彼等を保護してくれ、人類が各種の自然災害や猛獣からの侵犯から救い出してくれるものと見なしているのである。古代ウイグル人及び匈奴、突厥、烏孫などの北方民族は、気候がほどよく、山を背にしてしかも水のそば、沃野千里の蒙古草原、阿尔泰山脈、漠北、漠南及び河套地区などのひろびろとした土地で生活していた。そして陰山（今の内蒙古狼山、大青山など）が彼の活動の最も多い地域であり、非常に多くの部族が自分の汗庭（政治の中心となる所）をこの陰山に設けたのであった。古代の陰山は牧畜或いは狩猟にとって最も優越した条件を設えていた。その主要な特徴をあげると、先づ狩猟の起源が早く、陰山が蒙古高原の南部に位置している所から、気温が比較的高く、山上の水は豊富で草が茂り、その為、生産や狩猟の時間が周囲の地区に比べて些か早くから開始されたということである。

次に、この地に於ける狩猟は周囲の地域よりも発展の水準が高く、更にそれは他の地域に対して模範的意義を持っていたということ。

第三に、陰山の狩猟は延長時間が最長であるということ。

第四に、狩猟と牧畜は、軍事と密接に結びついていたということ。

などである。

「古代陰山は水が豊かで草が茂り、樹木は繁茂し、獣が生息するのに適しており、その為陰山には野性の獣が多く、これは十分に人を驚かせる程であった」（『陰山史前狩獵文明』・内蒙古社会科学院）。

内蒙古五原県西北部には狼山が有り、布特哈旗の西部には狼峰がある。これ等の山と山峰の名称がともに狼を以って命名されていることは決して理由のないことではない。『漢書・匈奴伝』には、「陰山上より下れば、草木茂盛し、禽獸を多くす」とあり、陰山が狼山と称されているというこの点から推測するならば、禽獸で最も多いのは恐らく狼であろう。周知の如く、狼は狩人と牧畜民にとって最大の敵である。狼の凶暴さ、残虐さ、勇敢さ、そして走ることの巧みさなどの特点是、原始人に恐怖と不安を感じせしめたであろう。しかしまた狼のもつこうした原始人の及びもつかない力は、彼等におどろきと、尊敬の念をいだかせたであろう。故に彼等は無邪気に自分達の先祖は勇敢でおそれることを知らない狼であると想像し、そしてまた自分も狼と同じ特殊な才能を持つことを希望したのである。こうして狼をトーテムとすることに関わる多くの神話と伝説がつくられたのである。狼に対して恐怖し、そして狼を親なるものと認めることを通じることによって狼の保佑を獲得したのである。

上述したトーテム神話の中に「子供が母狼にやしなわれ育つ」という筋がきがあるが、これは他の多くの民族の神話の中にも有る。例えば、「ローマの建国者、羅繆魯斯 (Romulus) と雷未斯 (Remus) は、泰伯河 (Tiber. R.) に棄てられた赤子で、後に牝狼に救われて養育されたのだと伝えられている。」(岑家梧『トーテム芸術史』)とされている。

これは即ち神話がただただ全くの虚構なのではなくてある一定の現実上の基礎を有しているということである。狼が長い期間、或いは短い期間、嬰兒を保育するということは、世界各地にひとしく見出すことが出来る。其の中で最も有名なものは、今世紀20年代印度の辛格牧師が救い出した二人の女の狼の子供で、東瑪拉と阿瑪拉である。

ある考察によれば、母狼の母性本能は非常に強く、別の小狼をうけ入れるばかりでなく、小犬までもうけ入れるほどである。

原始人は狼が幼児に乳を与えるのにおどろきふしぎに思い、狼には人に対する徳があつて、それは人の性と通じており、感情があり、そして人と同類であると思い、そこでその恩徳に感謝して、狼を親属或いは先祖と認めたのである。それに原始人は当時まだ男女の結合と嬰兒の誕生との間にある因果関係が理解出来なかった為に、女性の妊娠や分娩のある種の「ふしぎな力」がひき起こすものであると思ったのである。彼等のこのような見方と、上に述べたような情況が結合して、狼が人を生むというトーテム神話が形成されたのである。つまり狼に対する恐怖、またその特殊な技量に対する畏敬、そしてその恩徳に対する感激、これ等がウイグルの先祖の中で狼に対する一つのトーテム崇拜を形成したのである。

それでは狼は最も早期にはどの氏族のトーテムであったのか、またどのようにして古代北方の突厥民族と同一のトーテムとなったのか、これが非常に研究の価値ある問題であるといえるのは、こうした情況が世界のトーテム史上では極めて少いからである。

我国の北方地域はひろびろとしており、地の様子と自然環境も複雑である為に、さまざまな経済の発展に適している。この為人類の生存と発展によりよい条件を提供したのである。数千年前、ここにはすでに広く人類の住居がつくられて、歴史的にも北方各遊牧民族活動の大舞台であったのである。つまり同時にまた各民族相互の交流往來の場であり、また戦争と融合の場でもあったのである。

匈奴の誕生と興起は、漠南の黄河河套地区と陰山の一帯であった。『漢書・匈奴伝』は郎中侯応の記載としてこう言っている。「北辺の塞至遼東の外に陰山有り、東西千余里、草水茂盛にして、禽獸を多くす、本と冒頓単于依りて其の中に阻み、治めて弓矢を作り、来去して冠を為る、是れ其の苑囿なり」これによって冒頓の王庭も亦た陰山の中に在ったことが解る。

ウイグル人の先民である丁零人は蒙古草原と中部、北部、それに西部のあるいくつかの地方

に分布していたが、彼等はやはり匈奴のとなり
の狼山で活動していたのである。『魏書』卷二『太祖記』によると、「高車の豆臣部を狼山に討」ったのである。『漢書・匈奴伝』には、周の穆王が畎戎を伐って、四匹の白狼と四匹の白鹿を得て帰したとある。周の穆王は西周（紀元前1066年～前771年）の帝王である。これは私が今までに目にした史籍の中で狼に関する最も早い記述である。この白狼というのは犬戎氏のトーテムである可能性が非常に強い。顔師古は、「畎夷は、即ち畎戎なり、また昆夷と曰う、昆字は或いは混に作る」と言っている。

後人の考証によると、いわゆる混夷、昆夷、猡、犬夷などと言うのはそれぞれ異なる時代の、異なる地点での戎狄部族に対する異訳である。段連勤先生は史籍と考古学的資料にもとづき、あわせて先人の研究成果を参照して、戎狄と鬼方は同一の民族に属することを証明した。鬼方は丁零の族源であり、そして丁零、高車、鉄勒は今日のウイグル民族の先民である。（『丁零、高車と鉄勒』）そしてそれは狼をトーテムとした部族なのである。

歴史上、民族の移動は往々にして民族の融合を伴うものである。丁零人は南西シベリア一帯から蒙古草原に南遷して以後、当地の匈奴人と一諸にまじって住むようになったのである。雑居によって必然的に婚姻、文化習俗などの方面に於ける交流と往来が発生し、そこから民族の大融合という現象から生じたのである。匈奴国家の衰亡は、匈奴の丁零に対する昔日の統治と被統治という関係もまた当然これにしたがって消滅させたのである。こうした状況は疑いなく民族の融合を比較的自由で広範な規模のものにさせ、それによって一層この二つの民族の融合が促進されたのである。

『魏書・高車伝』に記載された高車の起源に関する、丁零と匈奴の婚媾の神話伝説（前文で述べた匈奴単于の女^{むすめ}と狼の婚媾の神話）は、大体蒙古草原の各族の遊牧民の間に、非常に長期にわたって且つまた非常に広い範囲にわたって流布したものである。故に魏収はこれを集め

て史に入れ、あわせてこれに「俗に云う」とつけたのである。こうして神話の中にも、氏族内婚姻制が、氏族外婚姻制に変わっていったあとを見ることが出来るのである。

長期にわたって、同一氏族の人々はずっと氏族内婚姻制という習俗を守って来た。しかしある時突然にこうした婚姻制を改変し、別の、あるトーテム標識を持って氏族の人と通婚することは、当然伝統的勢力の反対と非難に遭遇したにちがいない。それが故に人々はこうした異氏族との通婚を、ある種の動物（即ちそれは男性の方のトーテム標識となっている動物）との間の性関係として言いあらわしたのである。匈奴人と丁零との間の通婚関係は、匈奴単于の娘と狼との間の交媾に、かくされた形で比喻されている。故に我々はその中から、当時丁零が、狼をトーテムとする民族であったということを知ることが出来るのである。

突厥が興起したのは紀元六世紀の中葉である。十九世紀末に漠北の鄂爾渾河の河畔で発見された突厥文『闕特勤碑』と『苾伽汗碑』によれば、「九姓回紇は、吾が同族なり」とある（耿世民訳『九姓烏古斯人民とはもともと我々自身の人民なり』）。回紇が鉄勒族の主要な構成部分であり、突厥は既に回紇と同族であるということを見ると、突厥は鉄勒の族系に属しており、鉄勒族の一支流の族であるということが理解できよう。上述した論点にもとづけば、突厥と回紇との間には族源と血縁の関係があることになろう。突厥が強大な突厥政権をうち立てた後、鉄勒各部と鮮卑族は征服され、突厥族の連盟に加入したのである。

薛延陀は鉄勒系の一支流の族（ウイグル族の先民部族の一つ）であった。

鮮卑はもと鮮卑山（今の吉林・哲盟科右中旗の西のあたり）に居住し、後に南遷して西拉倫河の流域に到り、匈奴奴隸主政権の支配の下にあり、依然として匈奴の統治の下に服従していた。そこで鮮卑と南匈奴、丁零及び西域各民族は共同して北匈奴に向けて兵を起し進攻したが、鮮卑は北匈奴に大敗したあと、結局匈奴の

故地に居ることになったが、漠北に留った匈奴二十余万戸もまたみな「自から鮮卑兵と号した」（『中国古代北方各族簡史』）のである。ここから当時鮮卑は匈奴、丁零と関係が密接であったことが解る。記載されている所によれば、鮮卑人の早期のトーテムは形は馬で表わされ、発音は牛（Sayibi）として表わされる神物で、『元朝秘史』には、「鮮卑人の祖先は二狼の生む所なり」と記されている。これはおそらく鮮卑人が丁零、匈奴と交流を持つ中で、彼等の狼トーテムを受け入れて、自分達の祖先は勇敢な狼から生れたのであると言い伝えたものであろう。

後には蒙古人もこの伝説を受け入れて、「其の先祖は一匹の蒼き狼と一匹の真白き鹿との結合によって生れ栄えたのである」（『元朝秘史』）と言われている。

即ち、匈奴、回紇、突厥、鮮卑、烏孫、薛延陀などの族は、共同の地域、同等の経済、文化生活、風俗習慣を持っていたのであり、彼等はまた相互に影響しあい、相互に融合しあうという過程ももっていたのである。

トーテムは血縁関係を以って連帯のかなめとした氏族の基礎の上に生れたものであり、社会組織は氏族から発展して民族となり、氏族、部族、部族連盟、民族などの過程を経ている。血縁関係を紐帯としてつくられた社会組織の発展は、血縁関係をもつて主とすると同時に地縁関係的な社会組織をも兼ねそなえていると考える時、一部の民族や部族によって崇拜されている

霊驗あらたかな神は変じて地区、民族の崇拜する神となるのである。

ウイグル族の早期の氏族は狼をもってトーテムとした。狼トーテムは、氏族や部族の分離、分利化によっても絶滅することはなかった。それどころか互いの密接な交流と相互に影響しあう中で徐々に匈奴、突厥、烏孫、回紇などの北方突厥語民族に影響を与えて、彼等は同一のトーテムとなったのである。突厥は突厥政権を樹立して、狼を突厥汗国のトーテムとし、突厥汗国政権の象徴としたのである。そしてまた回鶻も強大な回鶻政権を樹立したが、狼はまた回鶻民族のトーテムとなり、政権の象徴となったのであった。

狼が氏族のトーテムから発展して部族、民族のトーテムとなったということは、この動物の持つ特徴にその最も決定的な要因がある。北方の遊牧民族は古来武力を尚び、頑強な尚武の精神を有していた。狼は古代北方民族の好戦、勇敢、恐れることを知らない頑強な性格に最も適合したものだったのである。彼等の考え方からすれば、凶暴な野獣は力と勇気の象徴であった。突厥の卢尼文闕特勤碑には、「天は賦^{あた}うるに力を以ってしたが因に、吾が父可汗の軍は狼の如き有り、敵人は羊の如き有り」とある。狼は彼等の心の中で徐々に一つの征服されざる力の象徴となっていったのである。

注（文中「大幡」としたのは原文では纛^{めす}となっているものである）

（1995年4月13日受理）